

ルイス・アピオラーザ博士による「ニュージーランドの林木育種の現状と課題」に関する講演会の概要

日 時: 平成 21 年 8 月 25 日(火)13:30~14:45 (受付は 13:00 開始)
場 所: 森林総合研究所関西支所 大会議室 (京都市伏見区桃山町永井久太郎 68 番地)
参加対象: 林業・林産業セクターの研究者、行政担当者、民間企業、苗木生産者
参加方法: 電話(0868-38-5795)またはファックス(0868-38-5139)による事前登録
申込期限: 8 月 18 日(火)、参加無料
使用言語: 英語(講演)

プログラム:

13:30-13:35 開会挨拶
13:35-13:50 講演「地域の林木育種の現状と課題」
13:50-14:30 講演 ルイス・アピオラーザ博士(ニュージーランド・カンタベリー大学上席講師)
14:30-14:40 質疑・意見交換
14:40-14:45 閉会挨拶

講演者: ルイス・アピオラーザ (Dr. Luis Apolaza) ニュージーランド・カンタベリー大学上席講師。

1967 年、南米チリ生まれ。

チリ大学森林科学部卒業後、ニュージーランド・マッセイ大学において、博士号「森林遺伝子・林木育種」取得。

2005 年より、ユフロの育種部門のコーディネーターを務めており、ラジアータ・マツ育種会社の技術委員会のメンバー及び部会委員長。

2006 年より、ニュージーランド・カンタベリー大学上席講師。

講演概要: 1.「NZ における林業と林木育種に関する戦略について」

2.「ラジアータ・マツにおける材質の超早期検定について」

NZ における 50 年間の育種を経ても、ラジアータ・マツの固有の材質はほとんど変化していない。確かに、育種の初期の数十年間は成長と形状の改良に重点が置かれてきた。しかし、1990 年初頭から構造材についてヤング係数の向上のために密度について多くの努力が払われてきた。

材質育種に関する進展を阻害してきたいくつかの課題がある。例えば、選抜規準の自己相関性、密度の重要性の過大評価、木材性質の年齢依存性の無視、技術的に意味のある閾値ではなく伐期齢そのものを育種目標としたこと、木材の等級間の差の全てが等しい経済的な意味を持つ訳ではないという事実の無視。

John Walker 教授と共同で、「材質」をスクリーニングするために従来と違うアプローチをとって研究を続けてきた。カンタベリー大学では、「悪い」材料をできるだけ早く(現在のところ選抜齢 2 年を目標として)排除することを目指している。我々の手法の長所と短所を示しながら、二つの研究結果を紹介する。

会場のご案内



公共交通機関をご利用下さい

- JR京都駅から
近鉄京都線で丹波橋駅下車(急行で約 10 分)
- 大阪/淀屋橋駅から
京阪電車で丹波橋駅下車(特急で約 40 分)

丹波橋駅(近鉄・京阪)から 東へ徒歩 10 分
左の案内図を参照下さい